報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　“真詩”論的形成——程朱理學背景下的詩論發展
（「真詩」論の形成——理学時代の詩論発展過程 ）

氏　　名　　陳　　磊

論　文　内　容　の　要　旨

明代文学史上の変革期となった中期（弘治から万暦中期まで）に、文学形態（スタイル）の主流となったのがいわゆる「古文辞」である。この時期に古典の文学作品を重んじ、その模範的な詩文モデルを学ぶべきであると強く提唱したのが「前七子」の李夢陽（1473—1530）である。彼の提出した詩文論は、それを一言でいうと、「真詩」という文学理論である。周知の通り、李夢陽以後、「真詩」は明の万暦から清の康熙にかけての文壇を象徴する言葉の一つとなった。

しかし、「真詩」という言葉はこの時に初出したのではない。「真詩」が詩論の用語として初めて現れるのは、北宋末の阮閱『詩総』（＝『詩話総亀』前集）においてである。二つ目に現れるのは、金末の王若虚（1174—1243）が『滹南詩話』に引用する南宋の鄭厚（1100—1161）の宋詩批評の中においてである。それから三つ目には李夢陽が「詩集自序」に引いている王崇文の観点である。長い歴史を経ているにもかかわらず、李夢陽以前にただ偶然のように二回しか論述されなかった。その理由を解明するには、最初から「真詩」という言葉が生じた思想的背景を考察しなければならない。

第 1 章　阮閱『詩総』が「真詩」を言ったのは、『詩話総亀』前集巻三「志気門」に、李献民『雲斎広録』巻二の「唐御史」という詩話を引いている際においてである。しかし、李献民の原文には「真詩」という言葉が現れなかった。「唐御史」というのは、王安石に反対し、貶謫された唐介である。彼の詩を杜甫の詩のような「詩史」というものと称するために、「真詩」という言葉を使ったわけである。この時の「真詩」は、「詩史」観の付属品であるため、独立した意味を持っていなかった。

第 2 章　王若虚が『滹南詩話』に鄭厚の次韻詩に対する批判を引用した。鄭厚の詩論観点は、彼の易学上の「対敵」という観点に基づいたものである。また、鄭厚は『孫

子』に対して高い評価をしたことも、当時の詩文論の中で流行している観点で、彼の易学上の観点と一致している。鄭厚の『芸圃折衷』は、孟子など聖人を非難していることも、彼の易学をその論拠とするものである。朱熹は、鄭厚の聖人非難を批判しているが、鄭厚の言論にすべて反対するわけではなかった。その理由の一つは、鄭厚が金国に対して主戦する主張を持っていること、もう一つは、鄭厚の兄弟の鄭樵が『詩経』の序に対して疑問を持っているが、この態度が朱熹に大きな影響を及ぼした。

第３章　鄭厚の「詩韻」観は、彼の易学を詩論に反映したものである。同じ時代の晁説之や朱弁における「真」という言葉の用例を考察すると、鄭厚のいわゆる「真詩」が「偽詩」の対立的なものでなく、「正確な詩」を意味していることが解る。王若虚における「真」という言葉の用例を考察すると、王若虚にとって「真詩」は宋代儒学の全体を批判する立場から、宋詩を批判するための概念であることが解る。王若虚のいわゆる「真詩」は、詩の本質（＝「情性」）を真実的に反映した詩である。また、王若虚の詩論は朱弁（1085―1144）から影響を受けたものである。

第４章　詩文の価値をめぐって、北宋の理学者は、後世に大きな影響力を持つ詩文論を提出した。本章では周敦頤（1017―1073）の「文以載道」説、程頤（1033―1107）の「作文害道」説を例として考察している。これらのような作詩の価値を懐疑する観点は、朱熹の詩文論に大きな影響を及ぼした。朱熹（1130―1200）は、作詩に対して慎重な態度を採っているが、詩を学ぶ際に必要な手本を選ぶ方法も提出した。元代に入ると、呉莱（1297―1340）、黄溍（1277―1357）、そして彼らの弟子の宋濂（1310―1381）は「詩文の法」に対する意見を提出した。特に宋濂は、理学における「気」の理論を利用し、詩文の価値が保証される作る過程を考えている。明代前期の理学者は、北宋の理学者のように詩文の価値を否定する態度でなく、条件を付けて肯定する立場まで調整した。ここで薛瑄（1389―1464）の「真情」観、陳献章（1428―1500）の「誠意」観を例として考察している。

第５章　李夢陽と何景明（1483～1521）との論争を考察すると、彼らの詩論は明初の宋濂が提出した論点を続いて討論していくことが解る。李夢陽の「規矩」や「臨帖」といった作詩法に対する比喩については、彼が詩と字を合わせて見る意識がその背景にある。「真詩」に対する追求は、彼にとって「三代の世」に対する憧憬でもある。李夢陽における作詩法上の学び順番と、朱熹のそれとは違う。李夢陽の順番は後代から前代へ様々な詩を学ぶゆえ、宋、唐、南北朝、漢など時代の詩を学ばなければならない。これによって、後世の詩の価値は学ぶ人に分かることになった。李夢陽における「真詩」は、「情」がすべて真実なものであるという観点によって、「情」を真実的に

反映した詩である。李夢陽はこのような「真詩」に価値があると考えている。「詩」の実質が「真情」であり、「治世」の「聖人」と今の詩人とが同様の「真情」を持つ以上、「古人の詩」に「聖人の道」が存在するとすれば、今の「真詩」にも同様の「道」が存在し、作詩の価値は大いに高められるのである。これは、李夢陽が提出した「真詩」論の最も重要な意味である。

本稿の討論によって、以下のことを明らかにした。李夢陽が提出した「真詩」論の位置付けを確定するために、それを長い歴史の中に置いて考察する必要がある。また、李夢陽の詩文論の中で最も重要な部分は、「真詩」論である。この詩論によって、後世の「師心」文学の理論は始めて成立可能となった。最後に、阮閲や王若虚の「真詩」論は影響力が少ない理由については、彼らは李夢陽のように理学の理論を利用して詩論を作ることをしなかったためである。